

未来ノート

-202Xの君へ-

陸上

山県亮太

兄のでかい賞状

父親の創意工夫

勉強嫌じゃない

一生懸命は美德

対抗心 翌年小4で優勝

9月24日、全日本実業団対抗選手権の男子100m決勝。山県亮太(25)は、日本歴代2位に並ぶ10秒00で優勝した。日本記録の9秒98まで、距離にして約20センチだった。実家は広島市のスポーツ

用品店「ニシヒロ」を経営し、「運動するのが当たり前に育った」。幼いころはサッカーや野球に打ち込んだ。父の仕事後の夜など、家族4人で愛犬をつれて出かけ、体を動かした。

陸上との出会いは、小学3年のある日。二つ上の兄・昌平さんが、先生に誘われて広島市の大会に出た。陸上の知識もなく、100mで立ったままスタートしたのに入賞した。「兄貴が

入賞して、でかい賞状をもらって帰ってきた。それがうらやましくて」

兄は一番のライバルで、対抗心があった。口癖は「どうして、いつもお兄ちゃん先なんや」。兄がランドセルを買ってもらったと、「なんで自分はない」と両親に訴えた。ただ、兄やほかの子に比べて体が小さかった。「来年は僕も出る」と言った亮太少年を、両親は「楽しんでくれたら」と送り出した。

ところが翌年、小学4年の部の100mで圧倒的な



9月の全日本実業団対抗選手権男子100m決勝で10秒00を記録して優勝した山県亮太

速さを見せつけて優勝。すぐに広島ジュニアオリンピッククラブ(現広島オリンピッククラブ)から、練習参加の話がきた。男子400mハードルで日本記録を持つ為末さんらも通った、地元でも有名なチーム。最初はこわくて、気乗りしなかったが「一緒に走った子が声をかけてくれて、すぐに友達になれた。先生も優しくて陸上は楽しかった」。かけ持ちは難しかったため、野球をやめて、陸上を選んだ。優しくほめてもらえる環境が大きかったと、父の浩一さんは言う。「周りから『速いね』って認めてもらえたのが大きい。認められるところに自分の身をおきたいというのは、子どもは大人以上に感じているんじゃないですか」(遠田寛生)

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。